



インドネシア 10 バンドン工科大学 整備事業(2)

A バンドン工科大学において、施設整備や教官の留学等を実施
B することにより、内部効率向上、教育の質的・量的拡充、研究
C 活動の強化を図り、もって人材育成および技術開発・普及を
D 通じてインドネシアの工業開発に寄与する。

承諾額/実行額 73億5,300万円/71億8,000万円
 借款契約調印 1994年11月
 借款契約条件 金利2.6%、返済30年(うち据置10年)、
 一般アンタイド(コンサルタントは部分アンタイド)
 貸付完了 2002年12月
 実施機関 教育文化省高等教育総局



外部評価者 原口 孝子(グローバル・リンク・マネージメント(株))
 現地調査 2004年9月

評価結果

本事業では、ほぼ計画通りに教育研究棟の建設、機材調達、教官の留学プログラム、技術支援(カリキュラム整備)等が行われた。期間はほぼ計画通りで、事業費は計画を下回った。

卒業までの年数は、1993年には学部平均6.3年、修士課程平均3.3年だったのが、2003年にはそれぞれ5.1年、2.6年と短縮した。大学院生数は、93年は910人だったのに対し、03年には目標(2,000人)の約1.7倍にあたる3,375人に増加した。修士号または博士号保有教官の比率は、94年の50%に対し、03年には目標の70%を上回る90%に達するなど、教育の質的・量的拡充がみられた。研究活動も強化され、93年の340件から、03年には434件に増加し、60社近くの企業と共同事業・受託研究を実施している。一部の研究成果(石油化学、ソフトウェア等)は実用化され、

社会で活用されている。

運営・管理を担当している当大学は、技術面は問題ないが、00年に法人格を取得して体制を移行中であり、移行後の運営・管理体制について注視する必要がある。また財務面では運営・管理予算の各学科への配分が十分でなく、各学科が自力で調達している。

各学科が行っている運営・管理状況を監理し、良い事例を拡げていくことが望まれる。

第三者意見

本事業によって、学生は科学技術面でより高度で幅広い就学機会を与えられ、各界で指導者となるような人材の育成につながっている。

有識者 Ms. Erna Witoelar (国際機関)

インドネシア大学修士(人間生態学)。現在、国連特別大使、UNDPシニアアドバイザー。元居住・地域インフラ省大臣。専門は環境学。

バンドン工科大学の概要

西ジャワ州バンドン市に位置し、その前身が1920年に設立されたインドネシア最古の大学の一つであるとともに、同国において理工系分野では最高学術水準を有する大学として、これまでに同国発展の中核となる人材の輩出、国内大学教官の再教育、同国の技術政策への助言を行い、工業開発に重要な役割を果たしてきた。2000年には、アジアウィーク誌にてアジアの優良理工系大学21位にランクされている。



教育研究棟第11棟(地球科学鉱物技術学部等)

本事業により整備された施設・機材を用いた研究の成果

工業技術学部化学工学科、美術デザイン学部デザイン学科は、国営石油会社より委託され、エンジンオイルおよびその容器の開発・設計を行った。

